

カニの巻 無我利道場定置

カ10話 入植

1975年8月

8月7日朝「歓迎」のT.M.L.あり、美文のトラックでサスケ、エーコ共に久志へ。とりあえず、公民館に荷を下ろす。その直後、年一回のハブ予防注射の巡回を受ける。夜、

橋口さんを訪問後、公民館で横になろうとしていたところ、勇都君がサシミを差入れ。

8月8日 年2回の大掃除、前田カメキクさんの空き家を掃除、引越す。

8月9日 年2回の薬剤散布にて部落作業に参加、賛成派とも顔を合わせる。午後4時、大石環境庁長官の枝手久視察を、反対派500名、大和村、瀬戸内町などより数十隻の漁船にて久志に集結、隠かでロマンチックにデモる。夜、生活福祉館にて、名瀬保健所の巡回員と我々に対する久志反対派の歓迎会。「Gパン姿では悪いだろう」とサスケと相談の結果、ドーティ（インド服）にターバン姿で出席。

8月9日 ガス、電灯つく。賛成派、反対派を向わず、手拭い一本持って部落埃粉廻り。

とここまでが、久志に住みついて4日間の日記です。何から何までトントン拍子に行っていたようですが、この後の反応は、正にブロードニキの何かを問うものでした、即ち、9日夜の私たちのスタイルを見て、ジイサン、バアサン達は仰天して、早くも後悔しはじめたと言うのです。「背広を着た人間の方が、本当は信用出来ないのだ」という、橋口さんの懸命の説得で、無人たちも一応納得が行ったようですが、それ以後私は、ヒッピースタイルをやめました。ところがサスケは断固として自らの流儀を譲らず、結局一ヶ月後、インドで出会って以来の友は、再びインドに向けて旅立ち、未だ何の音沙汰もありません。

自己変革と言えば、9日のデモの時、こぶしを突き上げて「ガンバロー!!」とやったのには、少々テレしましたが、今ではこちらが音頭をとるようになりました。

ところで「無我利道場」の名称の由来ですが、「ムガリ」とは島言葉で何かと屁理屈をこねて逆らう変屈者を言うのですが、博文がこれに「無我利、なるアテ字をしたことによって、俄然、反逆者のニュアンスを帯びました。博文の詩を一目見て私は新しいコミュニケーションの名を決めたのですが、それは入植何ヶ月以前の事、「本質は実存に先行する」のです。



第11話 豊年祭

1975年9月

8月と9月は奄美の祭りのシーズンです。そのクライマックスである部落豊年祭も、石油基地斗争勃発後は、反対派と部落が週を変えて招き、招かれるという交流を重視するようになったため、一ヶ月以上も祭りが続く感じです。加えて、反公害市民会議主催による新しい軍中行事「枝手久祭」まで創作したのであるから大変です。

若者不在の久志も、この夏は私たちの参加によって、十数年ぶりに土俵を作り、豊年祭の準備を始めました。それを見ていた賛成派から「せめて軍一回の祭りくらいは一緒にやろう!」という要請があったのですが、勢いづいたジイサンたちは、「枝手久を売り払おうなどという奴らと、祖先が祭れるかッ!」と、これを蹴った上、市民会議に動員をかけ、部落はじまって以来という盛大な豊年祭をやりました。終日雨戸を閉ざし、口惜しさを噛みしめた賛成派10戸。両派の反目にこれが決定的な一打になりました。

勿論、私たち「無我利組」6名はてんでこ舞いの裏方役でした。しかしともかく、祭りのポスターから、旗、幟^{ぼう}約30枚などのデザインから文句まで、橋口さんから全て私に一任されたことは、大変な光栄でした。職人の道も、芸術家の道も、中途半端に放ったらかしてしまった私ですが、此処へ来てやっと「奄美人民戦線美術部」というポストが得られたわけです。この美術部は、祭りそのものをデザインしなければなりません。それは単にうわべの装飾ではなく、島人の心理をも晴れがましく祭り上げねばなりません。そこで、私は幟の文句に「守ろう! 戦おう! 許さぬ!」といった定文句の他に「枝手久万々! 奄美よ永遠なれ!」といったロマンチックなのを何本か書きましたが、決定打として、「南無枝手久神」としたいめてみました。反対派集会に披露したところ、思った通り老人たちは、「これじゃ、これじゃ、これが一番じゃ」と、讃めてくれました。唯物論の橋口さんは? さてどんな顔をしていたか覚えておりません。

その後、靈感のあつて、枝手久神は神明に昇格されたことも、伝えておかなければなりません。なにしろ彼、時には彼女、は、奄美の神々の今や出世頭なのですから。

ところで、このへんで私の本性を明かしますれば、フーテンの頃より小銭を稼いで、仲間たちに焼酎を振舞い、ドン※



八月踊り

※チヤン騒ぎを喜び、ヒッピー時代には「お祭りポン太」を名乗り、若者たちを「乗せる」ことに努め、いずれは世界人民をパツカスの祭典さながらの熱狂の中に、燃之上らることを夢見る「お祭り工掛け人」なのでございます。ハイ!

第12話 部落会解散

1975年10月

豊年祭から一ヶ月後、10月5日、区長から誘われて出席した部落常会が、私にとっては初めての、そして全ての人々にとっては最後の「久志部落常会」になりました。

賛成派、反対派、両派の話し合いは猛烈を極め、島言葉の分らない私には、何のことだかさっぱり分かりませんが、激怒したハ部オジが、賛成派の二人のボスを怒鳴りつけて、会場を立去った時、一切のケリがついたのです。一年のクライマックスである豊年祭があのような形になった以上、形だけでも残っていた部落会の存続も、今や不可能でした。

「賛成派と反対派は、今後二度と席を一つにすることはない」ことが、最後の満場一致でした。「ではこれで、伝統ある久志部落会は永久に解散いたします」と司会の橋口さんが宣言をしました。もはや不可避な運命だということは、全ての人々に分っていたはずですが、この宣告は双方を深い悲哀のムードで包みしました。血縁、親族、幼なじみの切るに切れなかった最後の皮が、ヨソ者の導入によって、プツッリ切れたのです。

「恥かしい、本当に恥かしい、こんな部落は日本中に無いじゃろう。祖先に顔向けもならん」と、私の脇にいた老人は嘆息しました。「このことは、奄美の歴史に残りますぞ」という声とともに「もう、久志もお終いじゃ……」という嘆きもありました。

部落会計は頭数に分配され、水源地の管理は双オーケ月交代ということになりました。たゞ、月一回の部落作業だけは代案が無く、今迄通りということになり「せめてもの救いじゃ」と、老人たちは言っていました。議論の発端であった区長問題は、結局ケリがつかず、翌年はついに久志区長不在ということになるのです。

さて、解散式には焼酎が回され、それまで正面から顔を合わせたことのない二人のボスが、私に挨拶に来ました。「こんな過疎のシマに来て下さったあんた方に、本来ならこちらから挨拶に行くべきところを、御存知のようにこんな状態なのでそれも出来ず、今まで怒っていたことをお許し願いたい。いずれ奥さんが来られた折にでも……」という、丁寧なものでした。客人に対する奄美の伝統的な温かさや怖れが、そこにはありました。とても憎める相手には思えませんでした。日帝権力の前に膝まずいた、ちょっとばかり欲張りな如くない中年男以外の何者でもありません。

ところで、「賛成派のキンネヤタヌキと、ポンがえらく親し気に話し合っていたが、騙されとるんやないかと、ジイサン、バアサンたちが心配しとるよ」と橋口さんに忠告され、私は改めて、立場のむづかしさを感じました。

以来今日まで、賛成派とは道ですれちがう時の軽い挨拶以外は、決して深入りしない事にしております。実を申しますれば、私めも「ポンポンタヌキ、なのですが、はてさて？ 賛成派工作にはどんな術を使いましょうか？





ハ
郎
オ
ジ
(81)



ア
ー
ボ
ー
ジ
イ
(80)



馬
太
郎
オ
ジ
(86)



常
吉
オ
ジ
(78)



金
吉
オ
ジ
(77)



サ
オ
佐
次
郎
オ
ジ
(80)



金
次
郎
オ
ジ
(73)



ヒ
ゲ
ウ
ジ
(80)

久
志
老
人
会
反
対
派
ジ
イ
サ
ン



ヌ
ビ
ウ
ジ
(71)

おは話 人身御供

1975年11月

橋口富秀という傑出した人物の、想像を絶するような献身的努力によって、支えられて来た久志反対派支部に、私たちが加入したということは、敵には脅威でした。私が住民登録に行った際、過疎対策に悩んでいるはずの宇検村役場の戸籍係殿は「あえて住民登録をする必要はないのですよ」と、しっこく、しっこく言うのです。「あの連中は、もともと平田を経由して久志に住み込んだのだ。久志では困る、平田に引取って欲しい」と、ある賛成派議員に言われたと、平田の宮原計介議員は語っていました。そこで彼は「彼らは一番の敵戦地にいるのだ。前線を引っ込めるわけには行かない」と答えたそうです。



久志共同体解散後の10月10日、村民会議主催の運動会の日、ミオと万葉がやって来ました。船酔いでゲンナリしていたミオは、トラックで名柄校に直行しいきなりトラックを走らせて、自己紹介したわけです。その夜は久志支部で歓迎会をしてくれました。

その日から、部落の真中の天井の低い軒の家で、私たち夫婦と、宮崎から船作りに来てくれたサト夫婦、子供2名と何人かの独身者との雑居生活が始まりました。試行錯誤と焼酎の乱れた日々が続きましたが、そんなある日、沖縄からサンタと一緒に来ていた女の子が、久志の浜で水死するという事故が起きました。無我利へ来て4日目、やっと船酔いが直ったと言って、ベタ風呂の浜で一人、レインコートを着て遊んでいたところを、波に連れて行かれたようです。

「娘を誘拐されて殺された」と、沖縄からは両親と一族7名が押しかけて来られました。「娘を連れ出した男を裁判にかける気がある」ことを、私は飛行場で告げられ、暗澹たる気分で名瀬の火葬場へ同行したところ、そこには喪服に身を固めた2〜30名の名瀬久志会の人々が、待っていました。遺骨を久志に運んだ時には、反対派全員が出迎えてくれました。万事が橋口さんの配慮です。「こんな温かい人々に見とられて、娘も幸福者です」と、翌日遺族の方々は帰って行かれました。

奄美へ入って三ヶ月目「とんでもない借りを、奄美に作ってしまった」と、その時私は思いました。今、私は、彼女が無我利道場の人身御供になってくれたのだと思っています。

この事件は、無我利に対する久志反対派の態度を、自他共に公然たるものにしたことによって、災い転じて大きな団結になったのです。

第14話 決意表明

1976年1月

年末を迎えて金は無く、私は半月、一ヶ月と沖縄や九州へ出稼ぎに行き、夜の歓楽街を似顔絵を描いて流しました。“首狩り。”と呼ぶこのバー、ギャンブル一回りの荒稼ぎは、当時一枚1000円としても、一晩で2〜3万にはなりました。可能な限り、出稼ぎはやりたくないのですが、最初の二年くらいは“伝家の宝刀”を抜きまくるしかありません。スワノセでのコミュニケーション作りの基礎もやっぱりこれで打ちました。短時間で確実な、しかもなるべく合法的に金と稼ぐゲリウ的荒稼ぎを身につけておく方が得策です。

さて年末になって、本来なら小作人として年貢を払うべきところを、何としたことか地主会から米20Kと乾麺などを贈られました。正月は年始廻りで二日酔い、三日酔い。ジイサン、バアサンの床の間にある“天皇一族”の写真を、いずれ必ず外してみせよう、とその時心に誓ったのですが、未だあまり成果は上っておりません。今一歩というところまでは行っているのですが、それに代わる何か、ひょっとしたらマリリン・モンローだって良いのかも知れませんが、何かは必要なのです。今後の課題というわけです。

市民会議四年目の正月決起集会、久志支部代表として立った橋口さんが「無我利の皆さんのお陰で、私もやっと両手があきました」と挨拶したあと、改めて私たちを紹介して、決意表明をするよう迫られました。

「今年は枝手久の鈍に、反対派の砦を築くつもりです」という私の決意表明に対して、約300人全員から割れるような拍手がありました。すっかり調子に乗った私は「こうなったら奄美で、骨を埋める気になりました」とまで言ってしまったので、拍手喝采と同時に、運命も定まってしまいました。

とは言えその頃、無我利道場は最も苦しい時代にありました。枝手久通いを一日も早く開始して、反対派の期待と支援に答えるべく船作りが、資金難などもあって遅々として進まず、酔いどれと朝寝坊の日々で、だいぶ評判を落しました。

そんなある日、度西から橋口さんと一緒にUターンした嶺清助氏が、大阪の鉄工場を処分して、本格的に帰って来ました。枝手久のイケンマには、斗争勃発当時、久志反対派が作った養鰻所がありますが、人手不足のまゝ放置されています。此処のプレハブを拠点にして炭焼きをするというので、私も半月ばかり泊り込みで手伝いました。

ある日の夕方、イケンマの沖に怪し気な船が停泊しました。県が打ちで環境調査に来るかも知れない状態だったので、二人共緊張しました。私は船から誰か上陸して来るようだったら話合ってみようと思い、早速お茶の準備をしました。ところが清助オジはヘルメットを被り、ナイフを腰に差し、長柄鎌を持って海岸へ飛んで行きました。引返して野天風呂に入ってもヘルメットは被ったまゝでした。言われた通り見張っていましたが、結局お客様はありませんでした。その後、意地の男、清助オジは、橋口さんに対する妙なライバル意識から、次第に“反対派の中の反対派”という立場をとるようになって行くのです。

第15話 無我利丸進水

1976年4月

橋口さんの区長再任をめぐる抗争はついに結着を見ず、反対派は「区長などいない」と、役場ボイコットを宣言、役場連絡員を兼ねる区長不在が、これより一筆続き、久志は村行政から全く見放されることになりました。

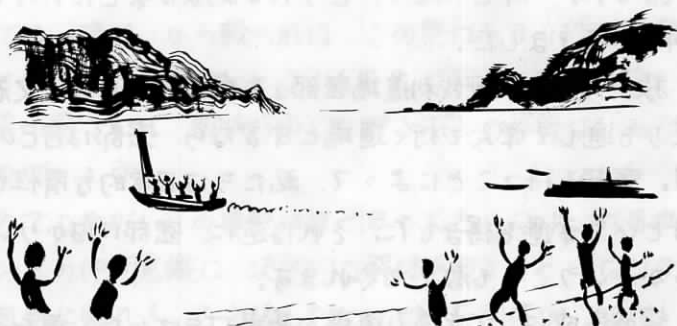
このアナーキ宣言の翌日だっただけに、待ちに待った「無我利丸」の進水は、鬼い切り派手にやろうということになりました。4月12日午後、私は部落のマイクで呼びかけました。「反対派の皆さん、只今からムガリ丸の進水式を行いますので、浜に集って下さい。平田からも反対派の皆さんがお祝いに来てくれました」

予定より何ヶ月も遅れたが、とにかく枝手久通いの船を、自力で作り上げたということは、それだけでも「手造りの斗争、としての意義がありました。長さ五米余、船体を真赤に塗りたい、船尾には無敵のインドラ神（雷神）の武器であるバジュラ（金剛杵）まで書き込み、南無枝手久神の幟を立てました。

平田の山下春英が、焼酎一本丸ごと船に吞ませたので「こいつは凄いいムガリ船になるぞ」と前評判、案の定五万円の中古四馬力エンジンには、その後ずいぶん泣かされました。

いざ進水、製作者であるサト船長以下8名のムガリ者が乗り込んで、さてエンジンを轟かせながら人々の声援に送られて走った時は、正に「男の花道、という気分でした。クス玉を割ったところで拍手、バンザイ。橋口さんのマイクの誘導で、岸に寄せて紅白の餅を投げると、子供のようにはしゃぐジイサン、バアサンたち。

次いで公民館にて祝賀会、この日ばかりは私たちが上座、村民会議、久志地主会、名瀬久志会、平田支部及び青壮年部、それに隣の生勝の2人の反対派ジイサンなどから、何と5万円近い祝儀が披露されました。



奄美に住みついて8ヶ月、南国の精神風土の中に、私たちはある確かな手応えを感じはじめたのです。それにしても「東燃が来て、一番得をしたのはオマエらだぞ、ワッハッハ」という清助オジの言い草は、あながち冗談とも言えないようでした。焼酎がまわる、平田の忠清オジの得意の三味線で島歌が出る、踊りが出る。熱っぽい南国の抒情が、単なる情緒を超えて、苦しめられて来た民族の怒りと怨念とを、胸に焼付けさせます。愛と憎しみ、喜びと悲しみのドラマが、丁史の重圧の中にかくも美しく昇華され、人間疎外の現代にも、なお脈々とした生命の讃歌と人間臭が、単純に、多様に、脈打っているのです。

夕方、ほろ酔い気分、平田ニケユウを見送りに浜に出ると、落日が枝手久島を背後から照らし出し、荘厳なシルエットを描いていました。「とうとがなし とうとがなし!!」

第16話 枝手久磐落成

1976年8月

無我利丸を得て、連日の通船が可能になり、鈍の南壁と家作りは本格的になりました。
枝手久磐は過去3回、平田青軍部によって行われ来たのですが、前年の豊軍祭の勝利で
気を良くした久志の老人たちは「この斗争はもともと久志が中心なのじゃ」と、枝手久磐
りを買って出て「さあ、無我利はガンバレ!」と来たのです。8月までに磐を落成し、久
志会場のセッティングにかゝるのが課題でした。ところが人手不足、女は新しくやって来
たポン子、カヨに、エーコ、ミオと4人もいるのに、4月末、平田から古杖を筏にして運
んだ時など男手はサトと私だけ、橋口さん、清助オジの他、4人のジイサンたちの助けを
借りるありさま。こんなはずではなかった……と、焦りと嘆息の日々でした。ところが、
5月に入って、私が祭りの資金を調達に出ている間に、ウルフ、ダマリなどが次々と現れ、
6月に私がデザインしたポスターが全国に配布されるに及んで、7月の棟上げ式には19
名に膨れ上がっていました。久志の家のすぐ裏に、もう一軒庭つきの空き家を借りていまし
たが、鈍にもテントを張り、ついには公民館まで借り切りしました。

8月、入碇記念日について枝手久磐は落成しました。8帖一間と8帖の土間、屋根はト
タン、三方にガラス窓、ハブの侵入を防ぐため床を上げ、隙間の無い、と同時にあまり色
気のない家が仕上がりました。設計及び棟梁はサトです。

落成式には再び、村民会議挙げての祝いをしてもらい、名柄や平田からも代表が来てく
れました。一年目にして、どうにか約束が果たされたわけです。南壁の方も、2反歩ばかりを
何とか拓きました。

枝手久磐を「無我利道場密部」と命名しました。久志を頭部とし、いわば外部社会との
交りを通して学んで行く道場とするなら、密部は自己の内部を瞑想する道場というわけ
です。密部を持つことによって、私たちは日常的な隋性や世俗的な鈍化から、自己を解放す
るという幸運を得ました。それは逆に、密部にばかりいると、人間はいかに「島呆れ」す
るかということも教えてくれます。

磐の落成は、文字通り道場の基礎打ちでした。現在の定住メンバーであるポン、ミオ、
ポン子、ウルフ、ダマリの5人が、何十名かの若者の中から、枝手久神に選ばれたわけ
です。そして、この時期を境にして、それまで老人たちの便利屋であり、人気者であっ
たエーコの存在が、次第に薄くなって行き、一つの役を終えたように、やがて南の島へ
と旅立って行き、タマと別れたサトも、出
稼ぎに出て翌年、「オ＝無我利丸」を購入す
ると「渡り転人」としての責任感から解
放されて、これまた面表島へと去りました。
無我利道場の第一期が去ったのです。



第17話 第4回 枝分久祭

76年8月

祭の宣伝は行き渡り、"枝分久神への奉納金、"ということで、全国の仲間たちに廻した"奉賛帳、"も、ついに28万円に達し、落成式の頃には既に30名を突破していた客人は、8月15日の祭り当日、ついに60名を突破しました。百名足らずの静かな老人部落に、得体知れぬ風俗の若者たちと、デスクバージャパンスタイルの帰省客。一年中でも最も危険なハブの季節に、野性的なカンを疎外されている若者たちばかり、その上更に私も緊張させたのは、連夜、久志の堤防にたむろして「ヒッピー共を挑発して、一丁やろう!」と、焼酎を呑んでいる賛成派のナンボウたちの存在でした。

夜の裏街道を歩いて来たお陰で、ヤクザ共とのやりとりには、多少自信のある私ですが、この時ばかりは刃物の上を渡る想いの連日連夜でした。おまけに古い仲間内での"声のデカイ方が正しい、式の、激論が焼酎の酔いを煽り、妊娠9ヶ月のミオの身を考える暇もない窮地に立たされました。一触即発、一切が霧散するかにさへ想えました。今にして思えばこの祭こそ、ヒッピームーヴメントの決算だったのです。

"部族、時代から、ヤマハボイコット運動を通して、常に"お祭りポン太、として、ヒッピームーヴメントの"祭司、を勤めて来た、私の呼びかけた祭りだから、きっと薄いロックコンサートか、マリファナパーティーでも用意されているものと、期待して来たのですが、いざ蓋を開けてみたところ、のど自慢大会と船漕ぎ競争、次いで相撲までとらされるありさま。「カウンターカルチュアとしてのムーヴメントは、一体どうなってるの?」というわけですが、成程、これまでの"流れ、から較べれば、この祭はあまりにも前衛的かつ革命的でした。"都会派、にとって、ガンバローとこぶしを上げたり、折り目正しい白ズボン姿で、舞台の片隅から奄美の皆さんに、御挨拶申し上げるポンの姿勢は、"ありきたり文化、に対する忤逆に見えたのでしょう。

さ、やかな見界の相違程度のものでしたが、この亀裂は日一日と大きくなり、村落社会と同じように、ヒッピームーヴメントの仲間意識に、決定的な解体を迫ることになりました。ひたすら体制に背を向け、「自然に帰れ!」を主張したヒッピー共同体派"部族、の中から、「自然を守れ!」と体制に刃向う姿勢が現れた時、集団の中に最初の解体があったように、「人民の中へ!」という主張が現れた時、ヒッピームーヴメントは刃二の曲り角を迎えたのです。「賛成派か、反対派か、中間の道はない」という澄まじい二元論を、私はいつの間にか体質化しつゝあったのです。

この祭りによって、関西などから帰省していた久志出身者たち、ジイサン、バアサンたちの身内の人々との"裸のジョイント、が、相撲をとることによって得られました。「年寄りたちのことを、よろしく願います」と言って、旅立つて行く人々を見送った後で、「潮の満ち引きがあってこそ海は永らえるように、人の出入りがあってこそ、島は生き永らえるのです」という、トカラ出身の老人の名言が身にしみました。

才18話 村議選

1976年8月

枝手久祭直後に公示された宇検村議選には、久志から橋口さんと、現職のボスの2人が立候補しました。「ヘン、選挙なんて……」と思っていた私たちでしたが、投票日が近づくにつれて、島人が全く夢中になっているのを感じて、選挙は祭り以上だということを知りました。投票日には、朝の四時から一番乗りをめざして立並ぶのです。

「このたび日本共産党は、橋口富秀を立候補させました。必ず当選させてみせます」と、党中央から派遣されて来た、選挙参謀はジイサンやバァサンに挨拶しました。無我利の女性たちから「豚味噌」という仇名をつけられたこの30代の若造は、橋口さんを立候補させ、当選させるのは誰なのかを、全く勘違いしているようでした。

選挙期間中、賛成派のボスの選挙演説の最高傑作を紹介しましょう。「皆さん、共産党は枝手久島で、^{うなぎ}鰻の養殖には失敗しましたが、ヒツピーの養殖には成巧しました。これは社会教育上やゝしきス問題であります。なぜなら彼らは、ヒツピーの名を騙る不逞分子であり、以前はスワノセ島で、天下のヤマハと戦って、島を我が物にせんとした孔つきの悪党です。気をつけないと枝手久島も乗っ取られますぞ！」

これを聞いて久志の老人たちは、カンカンになって怒り、後日、橋口さんは当のボスに食ってかゝり「ヒツピーの養殖の仕方があるのなら教えてもらいたい。ワシは宇検村中にヒツピーを増やしたいと思っとるのや」とやったそうです。



村民会議副議長
橋口富秀(久志)氏

根本的には、議会制そのものを否定している私には、「党か、人か？」の議論もナンセンスですが、百票足らずで当落が決まり、「何処の誰は誰に投票するだろう」などという非匿名性社会では、選挙に無関心ではいられません。結果は具体的であり、大同小異ではないのです。村の腕白で、低能で、助平で、ズルでどうしようも無かった連中が、ボスに成り上って、村を売り払おうとしているのですから、それに対して怒鳴り散らし、真相を追求、暴露することの出来る論理性と、常に弱者の側に立つ正義感を持つ人物を、ケンカの代表に選ぶのです。

「一票足りない」ことが、事前に予測されたので、サトとのトラブルで家出していたタマを呼び寄せ、決戦にのぞんだ結果、橋口さんは90票ぎりぎりですえ。89票3名の中から、くし引き、で1名がすべり込むというきわどさ。14議席中、反対派は僅かに平田の宮原訂介氏と橋口さんだけ、名柄、阿室からは裏切り者が当選し、久志からは2名、屋鈍、宇検の両端部落からはゼロということになりました。

「ワシには勝つことは分ってましたよ。なにしろ富秀には枝手久の神様がついてまじからねえ」と、一人のジイサンが酔っぱらって、盛んに力説していました。

公害から奄美を守る郡民会議

議長
松原若安氏



事務局長
大津幸男氏



名瀬在住久志会
中原植則氏



反公害宇検村民会議

議長
吉久文吉氏
(名柄)



事務局長氏
森谷次男
(名柄)



副議長

宮原計介氏
(平田)



才19話 死と生とMA-T計画

'76年9~12月

九月に入って台風17号が襲い、凄まじい雨を伴ってトカラ列島上空で、3日間も停滞しました。部落中のテレビは毛沢東という、チベットへの侵略者の死を告げて事切れしました。枝チタ砦に幽閉されている仲間たちを、橋口さんのヤマハボートで迎えに行つて、私たちは初めて、スワノセ島の悲惨を報らされました。ラジオはずうっと、SOSと救助を突況していたそうですが、凄まじい山津波に本村が飲み込まれ、親しき友、シマ、ロク、生後一日のロクの三女、そして上地のジイとスワ子さんが死んだということです。ヤマハ侵略以来、スワノセは呪われた島と化し、この翌年にも次々と3名の水死者を出し、ついにヤマハの社長自身が、スワノセでアキレス腱を切るに及んで、昨年、ヤマハは地鎮祭のやり直し、鎮魂祭をやったそうです。どうやら悪党共も本気で「神のたゝり」を恐れはじめたようです。愚か者がどれだけ本気で悔い改めたか、今後を見守りましょう。

月末27日の夜、久志部落に十数年ぶりという産声が流れました。産婦など昔からいず、皆自分一人で生んだということなので、私が助産夫を勤め、ミオは約一時間の陣痛の末、無事女兒を誕生、宇摩、様をしっかりと両手で賜りました。「これ私の赤ちゃん、皆んたのではないの」と、三才のお姉さんになった万葉が起き出して、産湯を囲んだ仲間たちの中へ分け入りました。禁欲苦行の絶好神シヴァのハートを奪う光り輝く娘、UMA、

誕生の興奮も覚めやらぬその翌朝、アブリ漢から帰った仲間たちから耳にしたのが「徳え島枝燃料再処理工場計画」の情報でしたが、その時はプルトニウムの名もピンとは来ませんでした。その翌日、前年水死した沖縄の娘の両親が、一回忌の追悼供養に来られました。別れ際に、初老の父親は、私の手に出産祝いを握らせ「お目出度う！」と言って去られました。「宇摩、おめでとう！」我が子の成長と共に、私は舌打ちなく、彼女を追いかけ来て、いわばペアで私の中へ飛込んで来た、プルトニウム、なるものゝ正体を、知らされました。知れば知る程に、恐怖と怒りが私を捕え、二ヶ月後のある晴れた日に、宇摩を抱いて初めて散歩に出た私は、突然、南の空に巨大なキノコ雲が発生する幻想に捕われました。波状的に襲って来る戦慄の中で、宇摩の不思議なえくぼが、私に「生きるべき場所と死ぬべき場所」を決めてくれました。深追いしすぎた狩人の悔恨はありませんが、ピアノのヤマハを叩いていたら、何と、プルトニウムが出て来たという、この運命の絶妙!!!

此処から南へ60K、耳カキ一杯分の放出で、百万人を肺ガンにするという汚染範囲内で、一日原爆3個分、年間4500発分のプルトニウムが、日本中の原発から運び込まれる「死の灰」から抽出されるのです。原爆製造は必至であり、臨界爆発ともなれば、一瞬のうちに全てがフツ飛ぶでしょう。1990年の完成予定を食い止めなければ、日本の核サイクルは完結し、プルトニウム警察の支配の下で、革命は永遠に葬り去られるでしょう。あゝ、人生は神のように単純です。5kgのプルトニウムから原爆一個、5kgの赤ん坊から、エネルギーの永遠の喜び、ウマ、光の中の輝き、死の死、シヴァの永遠の伴侶

才20話 環境調査阻止

'77年1~3月

斗争2年目の夏のある日、釣りに出ていた久志のヒゲウジは、無人の枝手久島に怪しい人影を発見すぐシマに帰って橋口さんに報告し、更に村民会議に連絡されました。すぐ船を繰り出し、ウヤドリの浜で調査をしていた東燃社員と賛成派のボス共を取り囲んだ反対派数十名、村民会議々長吉久文吉オジの一言で、ピタリと首筋に当てられた長柄鎌が正に振り下ろされんとする寸前まで行きましたが、その時は口の中へバナナを頬張り、背中に「公害反対」と書かただけで惨事を免れ、押しかけて来た賛成派も逃げ散りました。

以来東燃は奄美の血の気を恐れ、鹿児島県に「公正中立」な調査を依頼、県は予算まで組んだのですが、どうしても枝手久へ近づく気になれず、予算の流れる3年目の春、懸命になって宇検村と瀬戸内町、大和村、住用村の南部四ヶ町村を説得しました。反対派はこれにデモをかけ、強引に出て来るなら来てみろと水軍をも編成しました。

日一日と緊張を深める中で、千匹のハブを目覚めですという春雷の轟く頃、「県はついに環境容量調査を断念しました」という、橋口さんのマイクの声が、黄昏時の部落に流れました。部落のどよめきが伝って来るようで、外へ出てみると、バアサンたちが私に向って盛んに手を振っていました。笑いながら、泣きながら。「バンザーイ、勝ったぞ!」とハ郎オジが、両手を広げてやって来たので「でも、東燃は諦めらんかもよ?」と言うと、「なあに東燃なんて問題にならん。ワシら薩摩に勝ったのじゃ!」と言いました。

その夜は、枝手久島が一望出来る勇都家で、久志反対派約30名で、夢にまで見た勝利の宴をやりました。「大変な喜びじゃぞ、これは」とヒゲウジも破顔一笑、二日酔いを永知の上で、迫害され、抑圧され続けて来た無名の人々の、素朴で単純な喜びに浴しました。

枝手久島の土地の主要部分を、宇検村民会議の責任者たちの名によって仮登記させたということも、島人の土地に対する執着の強さから考えれば、久志の无地主の要断は大きく評価せねばなりません。「いよいよ決戦、勝利は目の前」と、毎年のように予言されながら五年目、真の勝利を共に祝う日まで、何人の无人たちが生き抜けるのでしょうか?「勝つまでは絶対に死なん」と張切る无地主たちに、私も又「あと一押しぞ!」と充てるのみ。



第21話 結婚式

1977年 4月

県の調査を阻止した頃、無我利道場は名実共に、存在の基礎を固めていました。オニ無我利丸の建造費を出嫁ぎに行ったサトに代って、ウルフがめきめきと実力をつけ、前手のアブリ漢では、すっかり春英に見込まれ、無我利丸の船頭として定着しました。一方私にとって霊的な兄妹であるポン子も、ついに此処で子供を育てる決意を定めるに至って、ではこのへんで、反対運動に景気と節目をつける意味でも、画期的な結婚式をやってみよう、ということになりました。

近年になって、結婚式と言え、名瀬市へ出てやるのが通例になってしまったとかで、これまた十何年ぶりの復活ということになりました。大阪と横浜の両親を招き、式場を整備しました。ノロという霊媒女性による土着宗教の伝統も途絶え、草ぼうぼうたる部落内の^{トナリ}拝所を浄め、公民館に仮設された部落の神々の神棚を新調し、女たちは衣装を仕立てました。さて当日は、南無枝手久神の幟の下に、拝所に着坐し、私が神主役を勤めて「ギマーティ ギマーティ ハラギマーティ」を歌って、荘厳なムードを醸し、「儀式があるからオメデタイのだ」という祝福の言葉を述べました。トネヤから披露宴会場であり、神々の仮住いである公民館までの「聖なる道」を、神主を先頭に、腹ボテの新婦、新郎、その親たち、仲人役のミオ、カメラマンのチエ、録音係のアジャなどの一団が通過するのを、遠くから見守る賛成派の御婦人方。そして公民館で迎えてくれる反対派の島人たち。有史以前から、喜びも悲しみも共にして来た同族共同体の、あまりにも鮮やかな解体の図でした。



橋口さんの司会、部落のおばさんたちの支援を得て作った折詰め料理が80人前。平田名柄からの村民会議代表、隣りの生勝の二人のムガリジイサン、久志反対派全員、無我利側は、西表島へ行っていたエー子や、出嫁ぎに行っていたサトを名めて十数名。森谷次男事務局長の三味線で、静照次兄が股グラにビールビンをはさんで、奄美春歌「一つヒヨコの4ンピマラ、2つクレタアバスマラ、3つ見事なラツパマラ……」の至芸を披露したあたりで爆笑は極に達し、島歌から六調まで、耳の聞こえないジイサンやら腰の曲ったバアサンから、4才になる万葉まで全員が踊りました。司会者がドクターストップをかけなければ、明日は又老人たちの血圧が、グンと上るというわけで、お開きとなりました。

無我利丸進水式、枝手久磐落成式、そして結婚式と一年間に三度まで祝福されて、無我利道場は「助っ人」から、斗争主体となるべく期待と責任を受けて立ったのです。